

# fure-fure



高知県立大学 看護学部  
Faculty of Nursing University of Kochi



U.K.  
Faculty of Nursing  
University of Kochi



## ■ 看護学研究科特任教授 南 裕子先生

高知県立大学が名称改正し共学になって、はや8年が終わろうとしています。2年前に野嶋佐由美学長にバトンタッチした後、私は看護学研究科の特任教授として博士課程の「災害看護グローバルリーダーの養成課程（略してDNGL）」の教育・研究に携わってきました。また、学部の1回生と4回生への特別講義、看護学研究科の修士課程や博士後期課程の院生にも教える機会が与えられました。その経験から、学部と大学院の繋がりの可能性を改めて考える機会となりました。

昨年春の学部卒業生のなかに1人、4月からDNGL博士課程の院生になった方がいますが、看護学部歴史始まって以来の快挙でした。大学院で学ぶには看護職としての経験が重要と考えてきたので、なぜこれができるのか不思議に思われるかと思います。確かにデンマークでは、フローレンス・ナイチンゲールの「看護の教育は大人にするものだ」という理念を信じて基礎教育に入る前に社会人経験をするために高校からの看護学校への直の進学がなかったほどです。まして大学院では、看護の経験のみでなく、大人の判断と行動ができる入学生を期待してきたわけです。ところが、本学の学部生の「立志社中」経験や「域学共生」の共通教育の履修を通して、それまで以上に学生が大人能力を培っていると思えるようになりました。このことは今年1回生の学部生たちと話をしても感じる事なのです。地域の課題を見つめる目や大人と交渉する能力などを培っている学生の話に私は感動するのです。だから、臨床経験は大事ですが、同時に他の学部では当然の「学部卒業直後に大学院進学」が看護学部でもありえると思うのです。

機会があると私は「日本で最初に看護教育を始めた歴史を考えると、現在では学部卒業生の少なくとも6割は大学院進学を視野に入れてキャリア開発をしてほしい」と伝えます。少子高齢社会の今日では社会の人々に看護の力がますます必要とされています。看護学の知識も技術も発展してきましたが、これからは急速に高めていく必要があると考えるからです。



## ■ 日本家族看護学会 第25回学術集会開催 長戸 和子先生

2018年9月1日（土）2日（日）、高知市文化プラザかるぼーとにおいて、「家族看護学のグランドデザインへの挑戦」をメインテーマとして、日本家族看護学会第25回学術集会を開催しました。日本家族看護学会は、現在、野嶋佐由美学長が理事長を務めておられる他、多数の先生方が所属し、学会の役員や委員会活動をしています。

「『家族看護』って？」と思われる方も多いと思いますので、少し紹介させていただきます。「家族看護」は、患者さんだけでなく、患者さんを含む家族全体をケアの対象としてとらえ、家族の健康の保持・増進を目指して援助することを特徴としています。本学看護学研究科は、大学院における家族看護学教育のパイオニアとして、31名の修了生を輩出、修了生は家族支援専門看護師、看護師、保健師、助産師、看護教員として、全国で活躍しています。

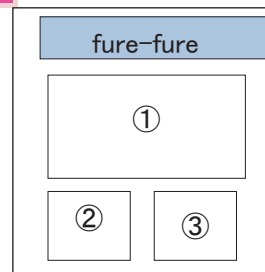
さて、学会には、全国から約760名の方にご参加いただきました。当日は、学内の先生方だけでなく、県内外の修了生、県内の病院や施設の看護職の皆様、そして、本学看護学部の在学生の皆さんにもボランティアとしてサポートしていただき、たくさんのプログラムを無事に運営することができました。暑い中、笑顔で頑張ってくださいました皆さんに、心からお礼を申し上げます。

また、学部の看護研究（卒業論文）を発表してくださった卒業生もたくさんいました。発表した皆さんは、4回生の1年間をかけて取り組んだ研究を社会に発信していくことの意義とおもしろさを感じられたようでした。

学会は、自身の研究成果を社会に発信する場であり、様々な立場や領域の実践家や研究者の方たちと意見交換し、新たな知の創造を導く場でもあります。学生の皆さん、今後も機会がありますので、ぜひ、学会を覗いてみてください。日頃とは違う先生方の顔が見られたり、書籍でお名前を見かける先生方にお会いできることもあると思います。



### ■ 表紙の写真



- ①4回生 クリスマス会
- ②2回生 看護実践の誘い
- ③1~4回生 赤ちゃん同窓会



## ■ 各学年の大学生生活

### ■ 1回生 ■



1回生は、学内・学外共に様々な体験を通して、看護について学んでいきます。学内では、生活援助論やフィジカルアセスメントで演習に取り組んでいます。学生間で、看護師役、患者役を体験し、患者さんの立場にたちながら「患者さんやったら、もう少し説明してもらいたいと思うのでは」「看護師の動きを考えて、ベッドの高さはもう少しあげたほうがよいのでは」など、より良い方法について具体的に考えながらのぞんでいます。12月には、初めての病院実習である「ふれあい看護実習」を体験しました。実習では、看護師さんと行動をともにし、実際の場面の中での看護について知るとともに、様々な職種の方々の仕事を見学させていただき、広く看護の役割について考える機会となりました。また、1月には特別講義「看護専門職者としての生き方について学ぶ」「大学院・CNSについて」について聞き、専門職者として、将来の自分の看護について考え、描いていっています。

### ■ 2回生 ■



12月21日に、「希望～一步を信じる～」というテーマで、看護学部のクリスマス会を開催しました。この会の企画は、2回生のクリスマス委員20名が中心となり、準備や運営は2回生全員が協力して進めました。参加したみんなが楽しめるよう、相手を思いやり、てきぱきと行動していたことが印象的です。「私はこれができるよ!」と助け合い、役割を確実に果たしていく責任感や行動力も伺えました。国家試験を目前とした4回生にエールを送り、また、全学年や教員とも親睦を図ることができる楽しいひと時となりました。

日々の学生生活では、専門科目が増え、知識を定着させるべく学内のあちこちで、朝早くから自己学習する姿がみられます。日々努力を積み重ね、着々と力を蓄えている様子が感じられるこの頃です。

### ■ 3回生 ■



1月8日（火）に看護研究への誘いPart 2を開催いたしました。3回生の春休みからスタートする看護研究について、科目担当者より全体概要の説明がありました。また、各領域担当教員より、これまで取り組んできた研究テーマについて説明がありました。参加した3回生からは、「各領域の先生たちの話を聞いて、自分の選択したい領域が明確になった」「今後のスケジュール調整が大事だと思った」「これまで先輩たちが取り組んできた研究テーマをみて、どの領域を選択するかまだ悩む」といった意見が聞かれました。領域看護実習のなかで対象者と関わる際に生じた疑問、関心から研究テーマを見だし、これまで学んだ知識と技術を総動員して1年間、看護研究に取り組んでほしいと願っています。

### ■ 4回生 ■



4回生は、最後の実習である在宅実習と看護実践能力開発実習が終了しました。在宅実習では、高知市および近隣の市町村にある12か所の訪問看護ステーションで、学生2名ずつが実習させていただきました。写真は、訪問看護ステーションでの実習場面です。学生は、訪問看護師に同行して自宅に訪問し、在宅療養者とその家族の生活を支える看護の実際を学びます。時には、理学療法士や福祉職にも同行し、在宅でのリハビリテーションや多職種が提供するケアについても学びます。この実習を通して、病院での看護にとどまらず、より広い視野で、多職種とともに看護を提供する力を身につけます。

12月中旬までに、1年間取り組んだ看護研究を完成させて提出し、後は看護師・保健師・助産師の国家試験を受験します。4回生は、冬休みも返上して、3月22日の国家試験合格発表を全員が笑顔で迎えらるるよう、日々頑張っています。



## ■ 選択して専門性を高める教育

### 【助産師コースで学ぶ】

助産師コースを希望する学生は、1年次から助産履修モデルにそって必要な講義を受講し、選考試験を経たのちに、3年次後期からより専門的な講義や演習科目を学ぶこととなります。その一つである助産技術論Ⅰでは分娩介助技術を修得します。ここでは、単なる手順としてではなく、「なぜそうするのか」という根拠を明確にすることで、個々の状況に応用可能な技術として学べる工夫をしています。最初は、滅菌手袋やガウンの装着、清潔操作による器材の準備から始めます。次のステップでは、教員や学生が産婦役となり、分娩に関わる様々な場面を想定した演習や、シミュレーターを用いた分娩介助の演習を行います。これらを通して、対象者を安心させ、励ましていく関わりを学びます。さらに、助産師が正常経過にある分娩を介助するには正常・異常の判断が必要であるため、シミュレーターを用いて異常な経過も経験します。このような演習を重ね4年次には、産婦さんを受け持ち、10例程度の分娩介助をさせていただきながら、助産看護の実際について学びを深めていきます。



### 【養護教諭コースで学ぶ】

本学の養護教諭の養成課程においては、1期生が養護教諭として活躍されていたことから始まり、現在も毎年15名程度の学生さんが養護教諭になるための学習を行っています。養護教諭になるために必要な教職や養護に関する科目を1回生の時から受講し、4回生では学校現場での養護実習を体験します。高知市内の小中学校において看護学で学んだ知識や技術を活用しながら、子どもや先生方との関りをおとして養護教諭としての資質・能力を磨いています。また学生は地域行事や学校での学習支援、小児糖尿病サマーキャンプなどにボランティアとして参加し、豊かな感性を育てています。様々な活動を通して個人・家族・地域というダイナミズムの中で子どもと家族を捉え、多角的な視点から支援していくことができる力を培っています。



## ■ 学生の活動

### 【イケあい地域災害学生ボランティアセンター】

私たちは、南海トラフ大地震で甚大な被害が予想されている高知県で、今自分たちにできることは何かを考えながら活動を行っています。メンバーは学内4学部の学生60名ですが、中でも一番多いのが看護学部生です。4つの部門に分かれ、それぞれがイベントを開催しています。ボランティアセンター（以下、VC）運営部門は、7月に三里地区で学生VCの模擬運営を、また地域防災部門は地元のお祭りである三里フェアで、岩手県産わかめを使った炊き出しおにぎりを配って東日本大震災復興支援を。また大学連携部門は他大学と協力して市民参加による防災運動会『カツオリンピック』を開催したり、地域交流部門は地域の人々と鍋料理を囲んで交流を深め防災を語る『土鍋ネット』を開催してきました。このようなイベントを通して私たちは、災害前から地域の人と関係性を築き、実際に災害が起きたときにスムーズに連携が取れるように日ごろから活動を行っています。

2回生

戸田菜々子・手崎真莉菜



### 【クリスマス会 2回生の活動】

私たちは12月に行われたクリスマス会の企画・運営に携わりました。クラスから20名クリスマス委員を決め夏に先輩から引き継いで秋頃から活動を開始しました。準備にあたり気を付けたことは、手が空いている人がいないように役割をみんなに振り分け、情報共有を徹底するなどして企画チームがまとまって動けるようにしたこと。1回生には、初めてなので緊張しすぎないように楽しさを伝えるようにしました。3回生は実習で忙しい様子だったので最小限の打ち合わせで準備できるように、4回生には国家試験の勉強や卒業論文の合間に、少しでも息抜きになるようにという気持ちをこめました。参加した皆さんの笑顔や「楽しかった」という言葉をいただき、こんなに達成感のあるものとは思っていませんでした。クリスマス会を通して私たちは、伝統行事を仕切らせていただく責任感や達成感を感じることができました。本当にありがとうございました。



【ニュースレターの名前の意味】fure-fure 学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。 [fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp](mailto:fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp)